

## アレツォ、サン・フランチェスコ聖堂内陣装飾の考察

—ピエロ・デッラ・フランチェスカとフランチェスコ会—

池上公平（共立女子大学）

アレツォ、サン・フランチェスコ聖堂のピエロ・デッラ・フランチェスカの《聖十字架伝》に関する研究では、《聖十字架伝》が同じフランチェスコ会に属するフィレンツェ、サンタ・クロッチェ聖堂の内陣装飾ときわめて近い関係にあることが指摘されている。しかしながらそれは自明のことと受け取られ、ためにかえって必ずしも十分考察の対象となっていなかったように思われる。そこで本発表ではあらためてこの点に目を向け、フランチェスコ会との関係という相の下に両者を比較検討し、サン・フランチェスコ聖堂の内陣装飾全体が意味するところを考察したい。

サン・フランチェスコ聖堂の内陣装飾はピエロ・デッラ・フランチェスカによる《聖十字架伝》の他、ビッチ・ディ・ロレンツォ工房による天井、入口アーチ内輪及び入口壁面上部の装飾、天井から吊り下げられている「聖フランチェスコの画家」に帰される《磔刑のキリスト》によって構成される。この他に現在は失われたステンドグラス、またアレツォ国立美術館所蔵のグイド・ダ・シエナ派による《聖母子》も内陣装飾を構成していたと思われる。これに対してサンタ・クロッチェの内陣はアニョロ・ガッディ工房による壁面、天井装飾に加え、チマブーエによる《磔刑のキリスト》、ウゴリーノ・ディ・ネリオによる祭壇画、さらにステンドグラスによって構成されていた。両者の構成は《聖十字架伝》ばかりでなく、内陣装飾の構成全体がよく似ており、アレツォの装飾がサンタ・クロッチェを範としていることは十二分に考えられる。

内陣装飾の構成が類似しているならば、その意味も類似していると考えられる。サンタ・クロッチェの内陣装飾について、N・M・トンプソンは聖ボナヴェントゥーラやウベルティエーノ・ダ・カザーレの影響を指摘し、そこに黙示録的ヴィジョンの表現を見る。サン・フランチェスコにおいてもサンタ・クロッチェと基本的に同じ意味が表現されているとするならば、サンタ・クロッチェにはない《最後の審判》をともしなうことも理解できよう。

とはいえ両者は同一ではない。サン・フランチェスコ聖堂における場面選択がサンタ・クロッチェ聖堂と相違していることはやはり無視できない。フランチェスコ会は早くからオリエントと深い関係を持っており、また東西教会の合同を決議したフィレンツェ公会議の際にも重要な役割を担っていることから、この相違に、15世紀中葉における現実の政治・外交状況の反映を認めることは不自然ではないと思われる。